

(薩摩郡薩摩町下別府)

位置と環境

薩摩町は、川内川中流域に在る。町村合併によって旧、中津川・永野・求名が合併して薩摩町となった。南は広く、西北に細く伸びている。周辺は、南から始良町・横川町・栗野町・菱刈町・大口市・鶴田町・宮之城町・祁登院町に囲まれた内陸の町である。南部に標高654mの中岳があり、その北麓を穴川が峡谷となって西流して川内川に合流している。

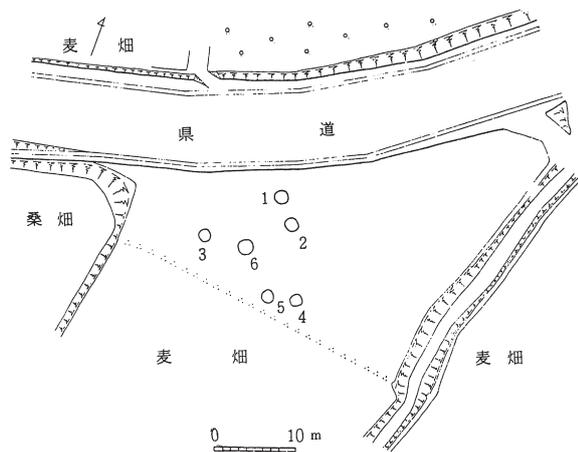
穴川の中流右岸には標高183.3mを頂点とする別府原台地があり、この台地が遺跡の所在地である(旧広橋駅東方875m地点)。

調査の経緯

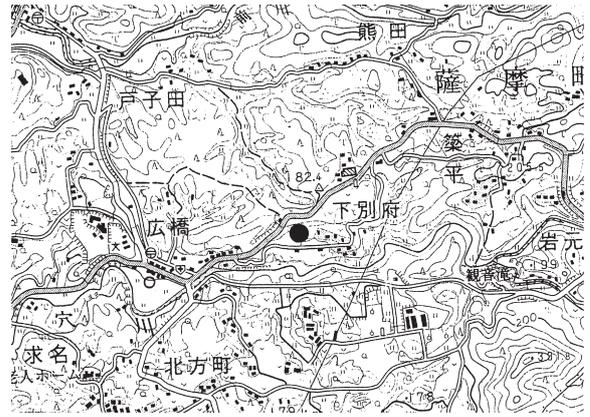
昭和42年、薩摩町永野別府原で、県道宮之城―牧園線の付替え工事が行われ、現場から地下式板石積石室墓2基が発見され、土器・鉄剣が出土したが、工事担当者の適宜な対応のないまま、遺跡は煙滅した。昭和44年2月、薩摩町教育委員会から、前記の遺跡を発見した県道隣接の畑から、農作業中に古墳が発見されたと、知らせを受けた。筆者は直ちに同年3月23日より29日まで7日間の発掘を行った。町教育委員会は、残存遺跡の調査と、遺跡の復元保存を企画し、筆者に委嘱したので、同年4月18日より21日まで4日間の二次発掘と復元作業を行った。

遺構と遺物

別府原古墳は県道を背にした三角形の畑地で、面



第2図 別府原古墳分布図



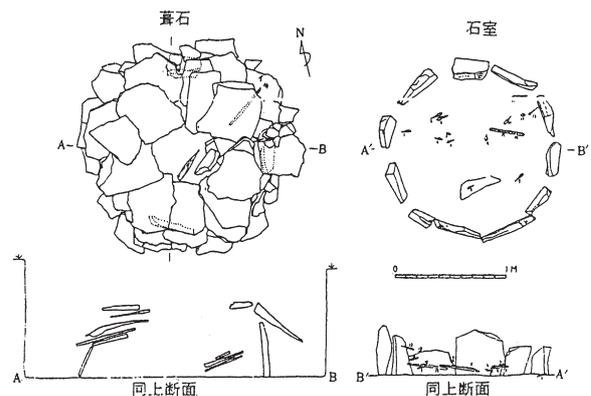
第1図 別府原古墳群の位置

積は928 m^2 である。北側の山頂から南の穴川の河岸へなだらかな傾斜をもつて下り眺望がよい。

地下式板石積石室墓は6基あって、遺跡地の西側に集中している(第2図)。遺跡地の東と西は段落ちしているが、南は同じ傾斜で下り、ここにも板石の露出が見られ、遺構であることが推定できるので、県道発見の2基と合わせて9基を確認出来た。

1号墳

まず円形に深さ1mの土坑を設け、床面に、安山岩の板石11枚を円形に埋め込んで石室を作る。板石は、やや内傾して下層の黄褐色粘質層に埋め込まれており、上面は不揃いで、相互に密着したものより、隙間のあるものが多い。遺体を床面に置き、埋土を薄く置いた上に、剣や鏃を上半身に近く副葬し、さらに埋土で埋めながら途中でも鏃をおき、埋土で遺体を覆った後、安山岩の板石を葺くように被せ、さらに葺石の上を土で埋めて地表から見えない状態に



第3図 別府原1号墳

して終了する。副葬された鍔剣は北側床面のほかに、石室の東北隅の葺石上に鍔剣が出土しており、石室内の盛り土の中からも鍔の出土があつて、盛り土をしつつ板石を覆い、その過程の中でも副葬品を埋置していることを示している。

2号墳

石室は円形で、14個の板石で、内9個は川原石である。1個は角礫、4個は安山岩の板石で、北側と南側に2枚ずつ配置されており、南側の一枚は内外面共に赤く彩色されている。副葬品はない。

3号墳

石室は円形で、安山岩の板石9個と川原石1個でつくられ、副葬品の内鍔は床面に出土しているが、刀は石室の壁上に置かれ、半ば石室外へはみ出し、剣は壁の内面に凭れるような形で斜位に出土している。

4号墳

葺石は安山岩の板石で、攪乱を受け相当剥ぎとられ、石室も北側は攪乱されて一部は動かされている。石室に使用した板石の内4個は川原石、残り9個は安山岩で、いずれも内傾して構築されていた。副葬された鍔は石室の東側床面と北西隅の攪乱地点から発見された。

5号墳

葺石は安山岩と川原石の板石を使用している。石室は円形で10個の板石を使用し内傾している。副葬品は土器小片2個のみであった。

6号墳

葺石は安山岩と川原石の板石が9個残っていた。6号墳では構築のために掘られた土坑が明らかになった。第4層の黒褐色粘質層に径2.1m深さ30cmの袋状ピットを設け、この内部に外径1.7mの円形石室が構築されている。葺石は一端を、袋状ピットの底面一杯に挿入し、ほかの端をピット上端に持たせてある。坑は最小限度の労力でつくられており、袋状ピットは葺石の基部を埋め込むのに必要なぎりぎりの掘り込みであった。

副葬では、剣のうち一個は東側の葺石2個に橋渡しするような状態に置かれて折れており、その付近の盛り土の中に鍔の一部が出土した。次の剣2個は

石室の東南隅に交叉した状態で出土した。この内、長い剣は茎を壁上に、鋒を床面にして3個に折れ斜めに傾いた状態で出土した。短い剣は茎を床面に鋒は床面より15cm高く、斜位で出土している。鍔は北東隅の壁に接して、一束となって出土した。

付説、道路工事で発見された内の1基は、断面が崖面に残っていた。それによると、底辺は1.6m高さ1.2mのドーム状に板石が積まれ、これを中心にして、幅8.5mの範囲は土色を異にし、積石上に盛土した状況を示していた。板石は朱色に着色され、内部からは刀の断片が出土した。

遺物

発掘によって出土した遺物は、剣7、刀1、鍔48、土器片2である。出土状況には石室床面と盛土内出土の二通りがある。後者はこの埋葬法に関わるもので、石室に蓋を用いず、逐次土を埋め戻して行く過程で起こる、この埋葬法独自の現象である。

1号墳出土遺物

短剣 長さ21.1cm、剣身17cm、身幅3.5cm、身の厚さ6mm、茎は長さ4.1cm、幅2.1cm、厚さは5mm。

長剣 鋒を欠く、茎の長さ4.2cm、同幅1.8cm、身幅2.9cm、同厚さ8mmで厚く作られている。剣断片剣身のみで、幅2.5cm、厚さ5.5mmである。

鍔

鉄鍔21個。平根式である。内17個は圭頭式で木質や、桜皮の残存したものが見られる。ほかに柳葉式2個、鑿頭式1個、柄部1個である。

3号墳出土遺物

剣1、刀1、鍔11個を出土している。鍔は石室床面に束になって出土しているが、剣と刀は葺石上に埋置されている。

剣は三分割している。剣身幅3.1cm、厚さ7.1mm、茎は長さ5.1cm、同幅1.9cmである。刀は長さ63cm、身の長さ53.8cm、幅2.5cm、厚さ7.5～6mm、平作りである。茎長さ9.2cm、同幅1.7cm、目釘孔は1個である。身幅が狭い。

鍔、11個、平根式である。内柳葉式9個、なかに逆刺のあるものが2個あり、そのうち1個は逆刺がいちぢるしく反っている。残り2個は圭頭式である。全体を通じて口巻きの桜皮の残存するものが多い。

4号墳出土遺物

石室の床面から、平根式の鍬が5個出土している。内3個は圭頭式で、鍬身に楕円形の孔を開けたものが1個ある。残り2個は異形である。

5号墳出土遺物

成川式の土器2片が出土している。

6号墳出土遺物

剣3個・鍬11個が出土している。剣1は石室の壁に寄せ掛けて出土、長さ58cm、剣身から茎へ自然に移行している。鋒付近では断面菱形であるが、次第に稜線が不明になる。中央で幅2.8cm、厚さ4.5mm、茎の厚さ2.5mmである。

剣2は、剣1と交叉して石室床面から出土した。全長36.4cm、剣身の長さ27cm、身幅2.7cm、身の厚さ5.5mm、茎長さ8.6cm、茎幅2cm～1.2cm、茎厚さ3mm、目釘孔1か所、身に比べて茎が長く、両削関である。茎に木質が付着している。剣3は、葦石上に埋置されたものである。鋒を欠失している。わずかに蛇曲が見られる。身幅は中央部で3.1cm・厚さ7mm。両削関で茎は長さ10.5cm、幅1.4cm、厚さ2.5mm、目釘孔は1本である。鍬は石室の北隅の床面に11本が1束となって出土した。平根式で2本は茎のみである。柳葉式4本、圭頭式3本、その他2本で、うち逆刺のあるものが5個である。6号墳の鍬はいずれも大型が特徴と言える。

むすび

地下式板石積石室墓の名称は、樋口隆康によって命名された。分布について見ると、川内川流域を首とし、球磨川流域にも若干あり、島嶼では天草島の妻ノ鼻では35基がしられている。乙益重隆は、長崎県五島列島の北端宇久町平郷松原の地下式板石積石室墓風の遺構との繋がりを推定している。昭和59年出水郡長島の明神下岡遺跡の発掘で、弥生中期以降古墳期に至る、同様の遺跡群が判明したことによって、確実なものとなった。

地下式板石積石室墓の性格を、寺師見國は「一般庶民の奥っ城」といい、乙益は「家族墓を単位とする共同体内の集団墓地」と述べ、小田富士雄は「阿多隼人の独特の墓制」と言っている。別府原遺跡では、農協の事業拡張のために、調査した結果、

183.3mの山頂に地下式板石積石室墓が発見された。

吉松町の永山古墳では、10号墳は、周溝を巡らすという特別の構造であるが、恐らくいずれも共同体の司祭者と言うような身分のひとの埋葬であろう。

別府原古墳の年代は、副葬品の鉄器から見て、5世紀と考えられ、一部6世紀に下るものもあると思われる。

資料の所在

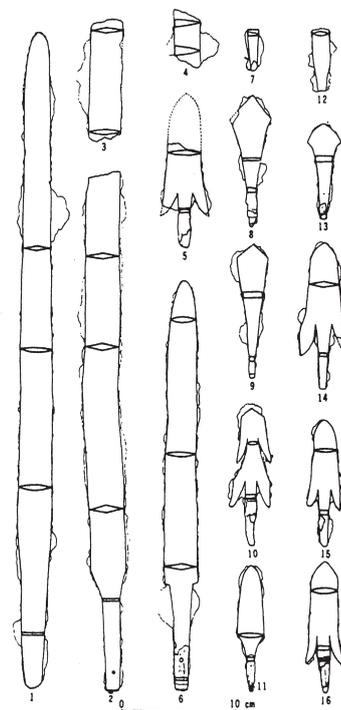
出土遺物は、薩摩町教育委員会に保管されている。別府原古墳は古墳公園として保存・整備されている。

参考文献

河口貞徳1971「別府原古墳」『鹿児島県文化財調査報告書』

河口貞徳 1971「別府原古墳・堂前古墳調査」『考古学雑誌』57巻第1号

(河口貞徳)



第4図 別府原6号墳出土鉄器